# 校長室だより

令和５年度
１０月１９日
ＮＯ．２８

## 「芸術の秋」個性あふれる世界、多様性の表現

今年も 10 月の 14～15 日に岡崎市中央総合公園で行われた「おかざきっ子展」は、多くの人でにぎわいました。(一時雨もありましたが）秋らしい天候の中、会場にあふれる「芸術」を、多くの人が満喫しました。秦梨からも多くのご家族の方に足を運んで子供たちの作品を見ていただき、ありがとうございました。

今年で６０周年を迎える「おかざきっ子展」、岡崎市民であればきっと、作品つくりや鑑賞に関わってきたことでしょう。今年のゲスト、岡崎出身の彫刻家、森靖氏も、「岡崎ではこれが当たり前ですが、国内を見ても世界的にも、これほどの規模の野外作品展は珍しく貴重だ」と言われました。過去にいらした芸術家の岡本太郎氏も岡崎の子供たちの「芸術」の完成度の高さに、「芸術は爆発だ」と驚かれたそうです。それが６０年もの間、続けられたのは、作品づくりに一生懸命に取り組んだ子供たちがいること、それをみんなに見てもらおうと指導した先生がいること、そしてその価値を認めて応援してくれた家庭や地域があること、その積み重ねによるものであると思います。

子供の作品は「個性の塊（かたまり）」です。１，２年生の作品は、何をどう作るかはもちろん、そこに塗る「動物の色」に、まさに子供たち一人一人にしか選べない個性を感じました。３年生の作品、一匹の魚の形や色、そしてそれを飾る部品の一つ一つにも個性が光りました。４年生の作品は、会場のどこにも同じものが見られない個性的な題材(作品)で、布を使って作った一人一人の「乙川」は、波のサイズや色、波打ち方まで、どれ一つ同じものはありませんでした。５年生の作品は、自分たちが育てた稲(わら)が素材として使われ、自分たちが熱心に活動してきた田んぼを飛ぶトンボに、まさに子供たちの体験や生活、それぞれの「生活」が強く表現されていました。６年生の作品は、秦梨の自然素材を使い、平面に自分の表したいものを形にする、個々の「物の見方」に個性が現れました。

同日、中総武道館で行われた、第 70 回理科作品展、第 50 回技術・家庭科作品展にも、代表の子の作品が展示されました。理科作品展の、自分で課題をもってそれをどう解決するか考え、実験し解明していく姿勢は、勉強だけに限らずこれからを生きる上でも非常に大切なことです。家庭科作品も、自分が使いたい、そんな「生活」感が感じられました。

何事も、自分で新しいものを生み出したり解決したりすることは大変です。けれど、あらかじめ形がないものを、自分で考えて作っていくことは、機械や AI にはできない、とても価値のあることです。そして、それはできた結果だけでなく、どんな思いでどんなことを表現しようとしたのか、そこに個性が表れ、その個々の過程にこそ価値のあることだと考えます。先の彫刻家の森氏も自身の子展の経験が、その後に大きな影響を及ぼしたと言われました。子供たちの多様な考えをが生きる機会を、大切にしていきたいものです。